

〈最も小さい者〉として、共に生きる志 ——かにた婦人の村の思想と実践——

同志社大学人文科学研究所助教 林 葉 子

はじめに

皆さま、こんにちは。本日は、ご来場くださりまして、ありがとうございます。

同志社大学人文科学研究所主催の第94回公開講演会「キリスト教信仰に基づく女性支援の歴史—かにた婦人の村の半世紀—」を始めさせていただきます。私は人文科学研究所の助教の林葉子と申します。

本日は講演者として、かにた婦人の村の名誉村長の^{あまは}天羽道子さんと、婦人保護施設いずみ寮の施設長で全国婦人保護施設等連絡協議会の会長をなさっている横田千代子さんをお招きしました。同志社大学人文科学研究所は今年で75周年を迎えますが、その記念すべき年に素晴らしい方々にご講演いただけることを、たいへん嬉しく思います。

1 日本唯一の婦人保護長期入所施設・かにた婦人の村

この会場には、今日初めてかにた婦人の村のことを知ったという方も、いらっしゃると思います。かにた婦人の村は千葉県の館山市にある婦人保護施設ですが、そもそも婦人保護施設という場

があること自体を、ご存知でない方が多いかもしれません。婦人保護施設については、後ほど横田さんのご講演の中で詳しいお話を伺いますが、そのご講演のタイトルにもありますように、婦人保護施設には、暴力の被害、特に性暴力や性搾取の被害に苦しめられた女性たちが入所します。かにた婦人の村は、日本で唯一の、長期入所のための婦人保護施設です。何らかの障害を持ち、社会の中で自立することが困難な方々が入所します。たとえば、字を読むことができない人、あるいは、数を10くらいまでしか数えられない方もいらっしゃいます。婦人保護施設では一般に、障害をもつ入所者の方が多いのですが、他の婦人保護施設では受け入れが困難な、特に深刻な状況に置かれた方々が、かにた婦人の村にいらっしゃいます。横田さんが施設長をなさっている婦人保護施設のいずみ寮は、かにた婦人の村のルーツの一つです。

かにた婦人の村に入所された方がお亡くなりになった場合、訪ねてくる家族がいる人は、わずかだそうです。最近、ある方が亡くなって、その方は約50年間、かにた婦人の村で生活し、その方のお母様のご存命の間は実家からジャガイモなどが送られてきたこともあったそうです。しかし、そのように家族との関係が続いた方であっても、お骨は、ご家族の希望で、かにた婦人の村の納骨堂に納められました。かにた婦人の村で誰かがお亡くなりになった時には、入所者だけでなく、創設者の故・深津文雄牧師やその家族、そして職員の方々も、かにた教会にある納骨堂に納骨されています。そして一年に一度、その亡くなられた方々、現在は101名ですが、その全員のお名前を読み上げて思い出を語り合

う機会にしているそうです。そのようにして故郷や家族から見捨てられた人であっても最後の最後まで受け容れる場として、かにかた婦人の村が作られました。

2 日本で最初の奉仕女として——天羽道子さんの志

本日ご講演くださる天羽道子さんは、かにかた婦人の村の母体であるベテスタ奉仕女母の家を生み出すきっかけを作り、その後、半世紀以上にわたり、日本で最初の奉仕女として、1945年の敗戦の後の社会的混乱の中で最も弱くさせられた女性たちの傍で、彼女たちと共に生きていくという実践を積み重ねてこられた方です。

天羽さんは1926年11月生まれで、戦後すぐの1946年に自由学園を卒業しました。自由学園では羽仁もと子から影響を受け、1949年、後にかにかた婦人の村を創設する深津文雄牧師から洗礼を受け、クリスチャンになりました。その同じ年、天羽さんは奉仕女（シュベスター）という存在を知り、自らも奉仕女となって日本社会の貧しい人々のために生きたいと願い、深津牧師にその決意を伝え

図1 天羽道子氏 (1960年頃)



ました。奉仕女になるためには看護の勉強が必要であったため、看護学校に入学するために、まずは1年間、夜学に通いました。その後、聖路加女子専門学校に入学して看護を学び、1954年3月に卒業した後、奉仕女になりました。

天羽さんは92歳の現在も、奉仕女として、かにた婦人の村で入所者の方々のケアのために尽くしておられます。私はこれまで何度か、かにた婦人の村の一室で天羽さんからお話を伺う機会を得ましたが、私がお話を伺っている数時間の間にも、天羽さんに会いに、入所者の方々が次々にその部屋へ来られました。そして天羽さんが「今はお客さんがいらっしゃっているので、また後でお話しましょうね」と伝えても、それまで待ちきれないという感じで、その場ですぐに話し始める方もおられました。そのような場に居合わせた私は、入所者の方々にとって天羽さんがどれほど大切な存在であるかということを実感しました。

天羽さんや横田さんのお話を伺っていると、かにた婦人の村の人々の歴史や、天羽さんや横田さんがたどってこられた人生は、単に、ある独創的な場が創られたとか、そこに優れた女性たちがいたとかいうような、個別の事例をはるかに超えていることに気づかされます。かにた婦人の村がたどった歴史は、まさに戦争というものが障害をもつ女性や子どもたちにどれほど深い傷を負わせたかを示し、そのように傷ついた社会的弱者が共に生きていくとはどのような実践であるのかという、人類全体に投げかけられた普遍的な問いに対しての、村人たちの人生そのものをかけた一つの答えであったと言えます。戦争という暴力の前で、あるいは

その後で、人がどのように傷つき、そこからどのように回復していくのかという、きわめて重要な問題を考えるための糸口を、このかにかた婦人の村の歴史の中に見出すことができるのです。そして忘れてはならないことは、このかにかた婦人の村の実践は、すでに終わった話ではなく、現在進行形だという点です。敗戦直後から性暴力や性搾取の被害を受け続け、それでも生き延びてこられた方々が、今もなお、かにかた婦人の村で暮らしておられます。

3 婦人保護施設のルーツと同志社

婦人保護施設は、そのルーツをたどっていくと、明治時代まで遡ることができます。皆さまのお手元にあるパンフレットの、内側に掲載した年表（巻末資料）をご覧くださいますと、その年表の最初の一行目に、明治時代の、ちょうど日清戦争の頃のことですが、矯風会という、現在も活動している、女性団体としては日本で最も長い歴史を持つ団体が、慈愛館という施設を開設するために準備を始めたことが記されています。その慈愛館は現在も婦人保護施設の慈愛寮として運営されており、性暴力や搾取に苦しめられた女性たちの支援を行なう場になっています。そのような婦

図2 かにかた教会の装飾



人保護施設の歴史を遡っていきますと、実は、かにた婦人の村は、同志社とも思想的に深い関係があるということがわかります。

今、前のスクリーンには、かにた教会の写真を映し出しています。この素朴で美しい教会堂の中には、かにた婦人の村の入所者の方々が自ら織った織物が飾られています。その教会の前方には、4枚のステンドグラスが掲げられています（図2）。そのうちの1枚、ちょうどチラシの右側中央に配置した写真のステンドグラスは、同志社出身の山室軍平という人物を描いたものです。よく見ると、そのステンドグラスの下の方には、アルファベットで“YAMAMURO”と記されています（図3）。山室軍平は、すでに明治時代から、娼婦にさせられた女性たちの救済や社会事業の分野でパイオニア的な役割を果たした人物として高く評価されていて、同志社大学のクラーク記念館の2階には、彼を描いたレリーフが今も掲げられています。

また、ポスター（巻頭）の中央上方にある別のもう1枚のステ

図3 かにた教会のステンドグラス
（“YAMAMURO”）



ンドグラスの写真には、久布白落実という女性が描かれていますが（図4）、彼女は、さきほどご紹介した矯風会のリーダーの一人で、特に廃娼運動という公娼制度の廃止を求める社会運動の中で、女性たちの人権を守

るために人身売買問題に取り組んだことで知られている人物です。久布白落実の父親は、新島襄の指導によって牧師になった大久保真次郎という人です。また、彼女の母親は、同志社と縁の深い徳富蘇峰のお姉さんの徳富音羽、後の大久保音羽です。

図4 かにた教会のステンドグラス
("KUBUSHIRO")



なぜ、その同志社と関係の深い山室軍平や久布白落実が、かにた婦人の村の教会のステンドグラスに描かれているのかといえ、二人が共通して取り組んだ廃娼運動と婦人救済運動が、かにた婦人の村の思想的なルーツになっているからです。久布白落実は、かにた教会の設立にも、直接、関わっています。山室も久布白も、娼婦にさせられた女性たち、すなわち社会の中で最も軽んじられ虐げられた女性たちと、どうすれば共に生きていくことのできる社会が創れるのかということ、机上の理論ではなく社会的な実践の中で追求しました。そしてそのような精神が、かにた婦人の村に継承されています。

あまり知られていないことですが、同志社を創設した新島襄は、山室や久布白が取り組んだ廃娼運動の精神的な支柱でした。山室軍平や久布白落実よりもさらに早い時期に廃娼運動に着手した人物として、矯風会の初期に活動した佐々城豊寿という女性がいま

す。新島襄の言葉や行動について記した『新島先生言行録』という本には、新島がその佐々城に語りかけた言葉が記録されています。この本は、1891年に刊行されたものですので、文語調で書かれています。ここでは、わかりやすいように現代の言葉に訳してご紹介します。新島は佐々城豊寿に、次のように語ったと伝えられています。

図5 石塚正治編
『新島先生言行録』表紙



私はあなたに頼みたいことがある。それは、ほかでもない、女権（女性の権利）の拡張のために、いっそう力を尽くしてほしいということである。その女権拡張の成就のためには、まず、今日の女学生に人権の重要性を理解させ、慷慨の心（世の中の不義や不正に対して憤ったり嘆いたりする心）を起こさせないわけにはいかない。これまで、女学生の多くは、長年、父母に苦勞させて育ち、自らも苦学していながら、ようやく学校を卒業するとすぐに結婚して、他の家の嫁になる。そのように他の家の嫁になれば、その後は社会のために働かないだけでなく、ほとんど学歴のない女性たちと同様に夫から抑圧され、せっかく学んだ技量を活かす機会もなく、かえって、学校では学ばなかった

ことばかりさせられて朽ち果てていくのは、いかにも残念なことである（中略）一般に女性たちは、社会改良や社交上のことについては、男性よりも力を持っている（中略）女性たちの力は、実に大きいものである。いま、あなたにこんなことを託するのは、あなたの命を縮めるようで忍びないけれども、私たちはお互いに、自己の利益のためではなく、皆、神の下僕としての義務を遂げるためにこの世に存在しているのだ。だから、他人に非難されても、決して心が折れることのないようにしなさい。たくさんの困難にあって苦しむ者は、天においては多くの恩賞を得られるということを忘れてはなりません。昔から、有名な豪傑や社会の率先者になったような人たちは多くの場合、攻撃に耐え苦勞する時期を経てきている。ただ苦勞するだけでなく、命までも犠牲にしてきたのだ。だから、社会の率先者になる者は、まず献身を覚悟しなければなりません。

このように新島は、当時の公娼制度の下で女性の身体が売買される女性差別的現実と闘おうとしていた佐々城豊寿に対して、命がけでその活動に取り組むようにと激励したのです。佐々城豊寿は実際、同じ婦人矯風会のメンバーにさえも彼女の廢娼のための闘いを理解されなかった時期があり、その言動が行きすぎていると非難されていました。新島はそんな彼女に対して、外からの非難に負けてはいけないと、世の不正と闘うために献身せよと、厳しくも温かく助言したのです。新島自身、まさに命を縮めて同

志社を設立しましたから、命までも犠牲にする献身を覚悟せよという彼の言葉には、説得力があったことでしょう。この礼拝堂には新島襄の肖像画が掲げられていますが、彼が希望を託した佐々城豊寿たちの廃娼の志が、たしかに現在まで受け継がれ、かにかた婦人の村の活動に長年にわたって取り組んでこられた天羽さんや横田さんを、この同志社の精神の表れである礼拝堂にお招きできたことを、きっと彼は天から見守り、喜んでいることでしょう。

4 深津文雄牧師と「底点思考」

かにかた婦人の村の母体であるベテスダ奉仕女母の家は、深津文雄という、深遠で独創的な思想を持つ一人の牧師によって1954年5月に設立されました。ベテスダ奉仕女母の家は、婦人保護施設としては、1958年4月に、現在横田さんが施設長をなさっているいずみ寮を最初に設立しました。その設立は日本国内だけでなく海外でも大きな反響を生み、いくつもの新聞で報じられました。毎日新聞、日経新聞、朝日新聞、キリスト新聞、*The Japan Times*、*Asahi Evening News*などが大きく報じました。

深津文雄の思想の核心は、この後、天羽さんがお話ししてくださいますように「底点志向」という言葉に表されています。社会において最も虐げられ、「頂点」の対極にある「底点」、すなわち社会のどん底から、さらに下へ下へと降りていって、最も下に位置付けられた存在へと心に向けていく志を、彼は「底点志向」と表現しました。

それは、聖書のマタイによる福音書 25 章 31 節から 46 節と、深く結びついています。すなわち「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは わたしにしてくれたことなのである」というイエス・キリストの言葉が、その根底にあります。「最も小さい者の一人」にしたことが、「わたし」、すなわちイエス・キリストにしたのと同じことなのだというその言葉は、社会の中で最も弱められた人々の姿に、神の子であるイエス・キリストの姿を重ねる、ということです。

かにた婦人の村は、知的障害や精神障害などを抱えて家族からも見捨てられ、どこの施設からも受け入れを拒否されてしまったような困難な状態に陥った女性たちを、一生涯にわたって受け入れる「コロニー」として設立されました。あまりにも大変な状況に陥っているために誰も手をさしのべようとしないうような、社会で最も虐げられた人たちをこそ受け入れる場所を新たに創るということ、そしてその場所を理想的な生活の場へと変えていこうとするという、誰も思いつかなかったような無謀ともいえる試みを、本当に実現してしまったのが、深津文雄という人でした。

ところで、この深津の「底点志向」というラディカルな思想

図 6 深津文雄氏 (1960 年頃)



を、大学の公開講演会という場でご紹介することに、私は最初、ためらいがありました。といいますのも、大学という場所は、深津文雄が追究したような「底点志向」とは全く逆の、「頂点」へ向かって上へ上へと高みを目指していくような、そんな場所であると感じられることが、私には多々あるからです。大学の講義にせよ講演会にせよ、講師になった人は聴衆に向かって、言葉を用いて何かを伝えようとします。言葉の世界は、語彙や知識が豊富であればあるほど高く評価される傾向にあり、大学の研究者たちは、自分の知識の多さやそれを言葉で巧みに表現する能力を常に競い合っています。そのような側面は、まさに深津氏が乗り越えようとした「頂点志向」であって「底点志向」とは相容れないのではないか？ それなのに大学の講演会で「底点志向」の素晴らしさを説くというのは自己矛盾ではないか？ という戸惑いです。

私は実は、最初にかにた婦人の村を訪問した日も、同じように「私がそこへ行ってもいいのだろうか」とためらっていました。私は入所者の方々からお話を伺いたかったのですが、それを言い出せずに、史料調査のためということで、かにた婦人の村へのご訪問の許可を得ました。

普段、入所者の方々の多くは、村の中の食堂で一緒に食事をなさっていますが、私はその日、その食堂でのお昼ご飯に誘っていただき、入所者の方々と初めてお会いしました。最初に自己紹介の挨拶の時間をいただいたので、私は「大阪から来ました」と短い挨拶をしました。そうしましたら、食事の後、入所者のお一人で、現在 77 歳の方が私のところへいらっしやって、「私の弟が

大阪にいたの」と言葉を発するなり、ぼろぼろと涙を流されて、それから15分くらい、ずっと涙を流し続けながら、自分の弟が大阪にいたということだけを、くりかえし言っておられました。このたった15分ほどの短い時間の間に、私は、その入所者の方が、いかに深い悲しみの中で生きてこられたのかということを知られたように思い、圧倒されました。ずっと昔に別れた家族がいたという大阪という地名を聞いただけで、初対面の私の前でも彼女の涙が止まらないということ。そして、そんなにも悲しいにもかかわらず、「大阪に弟がいた」ということ以上の何かを言葉にできないということ。しかし、豊富な語彙で15分間語り続けるよりも、彼女の涙のほうが、正確に彼女の思いを表しうるのではないかとも思えました。

涙といえば、私はかにかた婦人の村で、そのような悲しみの涙とは異なる種類の涙に、やはり強く心を動かされたことがあります。私はある時、横田さんのご案内で、かにかた婦人の村の中を散策していました。すると、少し遠くの方に入所者の若い女性がいたのですが、その女性は、横田さんの姿を見つけるやいなや「横田さーん」と叫んで山道をこ

図7 横田千代子氏



ちらに向かって必死になって駆けてきて、横田さんにバツと抱きついて「会えて良かった！」と泣き始めました。くりかえし、「会いたかった」「会えて良かった」といって泣いている、その姿は、彼女がどんなに横田さんを信頼しているかということを全身で表現していました。しかし同時にそのことは、彼女が横田さんと出会うまでに、社会の中でどれほど辛い思いをし、どれほど深い孤独に耐えてきたかということを表しているようにも思えました。そのような、涙になって溢れ出す言葉にならない思いに接して、私は、言葉のもつ力の限界について考えさせられました。

5 言葉の可能性——回復のために自らを語ること

しかし、ベテスタ奉仕女母の家の史料を拝見しているうちに驚かされた事実の一つは、いずみ寮やかにた婦人の村が、入所者の方々の表現活動を、言葉による表現も含めて力強くサポートし続けていたことです。かにた婦人の村のルーツであるいずみ寮では、設立からわずか4ヶ月後に、『原石』と題されたガリ版刷りの文集が創刊されています（図8）。つまり、かにた婦人の村の入所者の方々も職員たちも、決して言葉の可能性をあきらめてはいないのです。

そして、そのような文芸活動が土壌となって、『マリヤの賛歌』（城田すず子著、かにた出版部、1971年）という一つの名作が生まれました。その『マリヤの賛歌』という作品は、（本名ではなく仮名ですが）城田すず子という女性の半生を綴った自伝です。

彼女が最初、強姦されるようにして性を売られるようになり、日本軍の兵士相手の「慰安婦」となったり、妾となったり、戦後は、いわゆるパンパンやオンリーと呼ばれた占領軍兵士相手の娼婦となつて、疲れ果てた末に、いずみ寮にたどりついたことが記されています。この作品については、特に彼女の「慰安婦」としての経験に着目されることが多いのですが、『マリヤの賛歌』というタイトルが付けられたことに明示されているように、むしろ彼女は、そうした経験の後にキリスト教と出会い、深津文雄らと一緒にコロニーとしてのかにた婦人の村を作り上げることになったこと、そしてそれが彼女の傷の回復の過程でもあったことを一層重視して記述しています。つまり彼女は、自伝を書くにあたって、自分の人生をただ単に性暴力と性搾取の被害者のそれとして振り返るのではな

図8 『原石』創刊号表紙
(かにた婦人の村所蔵)

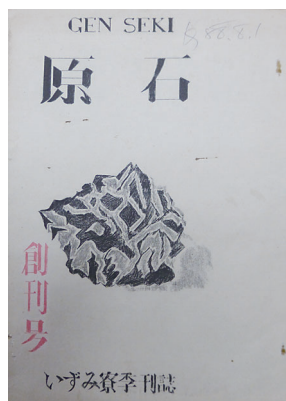
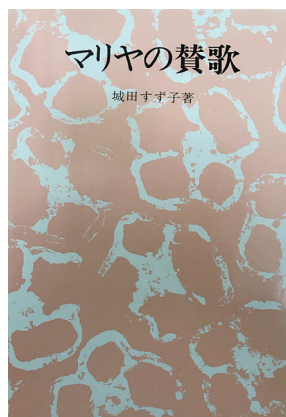


図9 城田すず子
『マリヤの賛歌』表紙



く、むしろ傷つけられた後にこそ新たな一歩を踏み出したことや、その再出発のために彼女を助ける人たちがいたこと、さらには自分だけでなく同じような辛い経験をした他の女性たちをも同時に助けるために、彼女自ら困窮する女性たちの新生活の場の創出に関わったことを、より重要な出来事として彼女の人生の中に位置づけました。そしてその自伝は、深刻な傷からの回復を可能にした神への「賛歌」として刊行されました。

おわりに——婦人保護施設の歴史を、女性史として記述するために

ここでもう一度、先にご紹介しましたステンドグラスの写真(図4)をご覧ください。ここで描かれているのは久布白落実であると、先ほどは述べました。久布白は、左側に描かれた女性です。この場面では久布白に対して、入所者の一人が「コロニーをつくってほしい」と要望したことに対して、彼女が「このお金を元手として自分たちでそのコロニーを作っていくように」と小銭を渡したことが表現されています。実は、そのコロニーがほしいという要望を伝えたのは、城田すず子でした。そのため、右側に描かれている女性は城田の姿であると考えられます。しかし、それならば何故、このステンドグラスには久布白の名前だけが記されているのでしょうか？

私は、日本における奉仕女の歴史の記述において、ベテスダ奉仕女母の家の創始者である深津文雄の功績ばかりが注目されるのではなく、むしろ、その彼を最初に動かしたのが、「奉仕女にな

りたい」と彼に伝えた天羽さんの声であったという事実こそ、女性史の決定的瞬間の一つとして大切に記録されていくべきではないかと考えています。

そして、それと同じように私は、かにた婦人の村を含む婦人保護施設の歴史についての記述においても、「コロニーがほしい」と伝えた城田すず子や、彼女と同様に自分たちを受け容れてくれる場所を求めている女性たちの声こそが最初にあったということが重視されるべきだと考えています。深津文雄という人が素晴らしいのは、彼自身は、城田すず子のことを「彼女は、ぼくの先生である」と書き残していることです（深津文雄「あとがき」前掲『マリヤの賛歌』所収）。社会の中で虐げられ、軽んじられて生きてきた彼女を、上から指導するというような姿勢ではなく、むしろその声から学び、ともに生きる道を探っていくという「底点志向」が、そのような表現にも顕著にあらわれています。そうしたことを考えあわせれば、なおのこと、このステンドグラスには久布白の名前と同時に城田すず子の名前が記されるべきであったと言えるでしょう。

さらに言うならば、城田が存命中に、城田という仮名ではなく本名でそこに名前を記すことができたならば、なお良かったかもしれませんが、社会の根深い娼婦差別ゆえに、娼婦とみなされた女性たちが本名を名乗りながら自らについてオープンに語ることは、非常に困難でした。

今もなお残る、そのような差別意識を超えて、これからこの社会の中にどのような女性支援の場を作っていくべきかということ

を、実に60年以上にわたって女性支援の実践の中で考え続けてきた天羽さんや、その活動を継承なさっている横田さんに、本日はお話いただきたいと思います。どうぞ、よろしく願いいたします。